



ナポリ湾とヴェズーヴィオ

目次

特集

ヴェローナから見た冬季オリンピック
安田侃のふたつの彫刻展

エレナ・フラッカーリ（特別会員）
安田 琢（理事）

会員便り

日伊協会入会に際しての自己紹介
よろしくお願ひします
北イタリア小都市の魅力（1）

宮部光幸（会員）
林 奈緒（会員）
大和達也（理事）

サローネ

Salone d'Italia

『スカルラッティから始まった2026年』

山口玲子（理事）

オンラインSalone

マリアンナ・チェスパさん『祝日や週末はどんなふうに過ごすの？
イタリア人の日常生活に迫る』

菅原明子（理事）

北海道日伊協会活動日誌

事務局より
編集後記

サローネ

Salone d' Italia: スカルラッティから始まった2026年！

山口玲子（理事）



今年の1月25日（日）、札幌は前代未聞の暴風雪で大荒れの天気、そうした中2026年北海道日伊協会新年会&SALONEが開催されました。会場はみべ音楽院Hall Scarlatti、僭越ながらSalone d' Italiaの講師を仰せつかった私は、ホールの名前に因み「スカルラッティから始まる2026年」というタイトルで、イタリアバロック時代の作曲家スカルラッティ親子の作品を中心に話を構成致しました。

先ず、新年の幕開けにふさわしく明るい曲、アレッサンドロ・スカルラッティ（1660.5.2パレルモ～1725.10.22ナポリ）のオペラ「愛のまこと」より「陽はすでにガンジスから」を、延与幸恵会員の華やかなソプラノ独唱でお聴き頂きました。舞台は北アフリカのアルジェリア、「陽の昇る時、世界は何と幸福なのだろう！」と、暁に感動して歌われます。アレッサンドロはオペラの他に600曲以上のカンタータを作曲しています。2曲目は室内カンタータ「私は心に感じる」（訳：私は恋に陥ることを怖れながらもあなたを恋するに違いない）、3曲目には彼の最も成功したオペラ「ピッコとデメートリオ」から「すみれ」（訳：露をおびて、香りの良い優美なすみれよ、お前たちは葉の陰に半ば隠れてつつましく咲いている。そしてあまりにも野心的な私の欲望を咎めている）を続けて演奏いたしました。



次にアレッサンドロ・スカルラッティの息子、ドメニコ・スカルラッティ（1685.10.26ナポリ～1757.7.23マドリッド）の作品をご紹介しました。ドメニコは16歳の時、父が楽長を務めていたナポリ王室礼拝堂のオルガニスト兼作曲家に任命され、その後ローマでも仕事をし、34歳でポルトガル王の宮廷礼拝堂の楽長としてリスボンに渡ります。そこで王女マリア・バルバラと弟ドン・アントニオの音楽教育、特に鍵盤楽器の指導に携わります。主に彼らのレッスン教材として500曲以上の単一楽章のソナタが生み出されました。1728年、マリア・バルバラ王女がスペインの皇太子フェルナンドと結婚しマドリッドに移る時ドメニコも同行、以後28年間スペインの宮廷において晩年を過ごします。今回は「クラヴィチェンバロのための25のソナタ」より3曲（第3番Allegro ハ長調、第2番GAVOTTA Allegro ニ短調、第12番Allegro ニ短調）、演奏いたしました。

更に、ドメニコ・スカルラッティと同じ年に生まれた有名な作曲家の作品もお届けしました。一人目はJ.S.バッハ（1685.3.31～1750.7 28ドイツ）。ご存じのようにバッハは子沢山で音楽一家、子供たちも有名な音楽家として活躍しています。今回はイタリア協奏曲第1楽章を弾かせて頂きました。もう一人の同い年は、ドイツで生まれイタリアで成功しイギリスに帰化したG.F.ヘンデル（1685.2.23～1759.4.14）。プログラムの最後はロンドンで初演された最初のオペラ「リナルド」から「私を泣かせてください」を演奏し、ソプラノの輝かしい高音ときらびやかな装飾音をお楽しみいただきました。

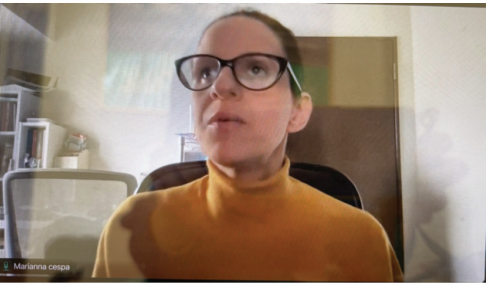
演奏の後には三部安紀子会長（みべ音楽院院長）よりホールの名前の由来についてお話し頂き、音楽家一族のスカルラッティのように多くの人々が集う場所に！という願いをこめてイタリア人のお友達が命名して下さったことがわかりました。正に現在も音楽家をはじめ沢山の人が国内外から集う大切な場所です！

大雪による交通障害のためキャンセルを余儀なくされた会員も数名いらっしゃいましたが、参加された会員の方々にはバロック時代のサロンコンサート風の時間を感じて頂けたのでは？と思います。こうして北海道日伊協会の2026年はスカルラッティから始まりました。皆さま、今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

オンラインSalone: マリアンナ・チェスパさん

祝日や週末はどんなふうに過ごすの？イタリア人の日常生活に迫る

菅原明子（理事）



様々な調査結果をもとにイタリアと日本の労働時間や休暇に対する考え方の違いを示しながら、イタリア人の祝日や週末の過ごし方を紹介するサローネでした。イタリアでは、国民の祝日に加え、雇用されている場合には、年に最低20日の有給休暇が保証されている他、通院等に充てる事が出来る年間104時間の労働短縮を認める手厚い福利厚生・労働時間制度があり、それらの休日を組み合わせて冬季は1週間程、夏季に

3～4週間程度まとめて休む(期間は職業により異なり2週間程度の場合もあり)、いわゆるヴァカンスが一般的で、文化としても根付いているとの説明でした。国民の祝日のうち、特に大切なのがクリスマス(Natale)で、12月8日に始まり、1月6日までと、キリストの誕生を祝う催しは1ヵ月近くに及びます。また、それに次ぐ重要な祝日は復活祭(Pasqua)とのこと。これらはイタリア人にとって宗教行事であると同時に、家族と過ごし絆を確かめ合う大切なイベントであるという話は非常に興味深いものでした。

国民の祝日「イタリア」

イタリア全土で祝われる祝日は計12日（下の表。復活祭は春分の次の満月のすぐ後の日曜日と定められているので、3番と4番は年によって日にちが変わる）、これに各都市特有の休み（守護聖人の日）が追加されます。

1	1月1日	元日
2	1月6日	御公現の祝日
3	4月5日(2026年)	復活祭
4	4月6日(2026年)	復活祭の翌日
5	4月25日	イタリア解放記念日
6	5月1日	メーデー
7	6月2日	共和国建国記念日
8	8月15日	聖母被昇天祭
9	11月1日	諸聖人の日
10	12月8日	聖母無原罪の御宿りの日
11	12月25日	クリスマス
12	12月26日	聖ステファノの日

北海道日伊協会活動日誌（2025年11月～2026年5月）

第16回 Salone CINEMA

「いつだってやめられる 7人の危ない教授たち **Smetto quando voglio**」

日時： 2025年12月21日（日） 14：00

会場： みべ音楽院5階ホール

参加者：受講生17名、一般8名

Salone d'Italia

『スカララッティから始まる2026年』

講師：山口玲子さん（理事）

ソプラノ：延与幸恵さん（会員）

日時：2026年1月25日（日）13:00~15:30（Saloneに続き懇親会を開催）

会場：みべ音楽院 5 階ホール

参加者：会員12名

2026年新年会

Salone d'Italiaに引き続き2026年の新年会が行われた。

第13回 オンライン Salone

『祝日や週末はどんなふうに過ごすの？イタリア人の日常生活に迫る』

講師：マリアンナ・チェスパさん（理事・立命館大学講師）

日時：2026年2月17日

参加者：会員・受講生4名、一般1名

実用イタリア語検定

第62回春季実用イタリア語検定が3月8日に行われた（中央区かでの2・7）。

受験者内訳は、準2級5名、3級4名、4級8名、5級7名。

次回の秋季検定は、10月11日に実施予定。

事務局より

○訃報

会員の遠藤清之さんが、2月6日に亡くなりました（享年84歳）。氏の協会へのご支援に感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



編集後記

La Notiziaの発行は、コロナ禍で外出の自粛が要請されるなか、会員の繋がりを絶やさないため金子前副会長の発案で始まったと聞いています。しかしコロナが季節性インフルエンザと同じランクに分類されるようになり普段の日常生活が戻ったこと、そして『会報』とニュースレターは内容で重複する部分が多いことから、2025年度中に最終号を発行して廃刊とさせていただくよう総会をお願いしましたが、雑用が重なり、その最終号の発行も実現できませんでした。

今年は抜き打ちで解散された衆議院の選挙で始まりましたが、その選挙戦の最終日を前にして、イタリアでは冬季オリンピックが開催されました。そこで閉会式が行われたヴェローナにお住まいのエレナ・フラッカーリさんにレポートを送っていただき、特集の一つとしました。押し詰まっただけのお願いにもかかわらず快く引き受けていただいたことに感謝しております。なお日本語の文章はフラッカーリさんご自身の原稿をそのまま載せました。

大和さんの北イタリア旅行は、ダラダラ続いた「異次元の金融緩和」や、コロナ禍以降常態化した財政規律の緩みにより円に対する信用がガタ落ちするなか、超大国の横暴な振る舞いにより引き起こされたエネルギー価格の高騰が加わり、コロナ前のように毎年1ヶ月のイタリア旅行がままならなくなったのを嘆きつつ（もっとも人々が虫けらのように殺されているのに、こうした嘆きは身勝手に過ぎますが）、読ませていただきました。ミラノのドゥオモを撮った上の写真は、大和さんの原稿に添付されていたものですが、スペースの関係でこちらに置かせていただきました。

次号の発行は晩秋、11月頃を予定しています。特集のテーマに関するアイデアや、会員便りへの投稿をお待ちしております。また次号は米倉副会長の連載を掲載させていただけるかと思っておりますので、こちらもお期待下さい。 A. M.

（発行：北海道日伊協会 連絡先：arcadiagreca@icloud.com）